

## 小学校における相談室の経営(もう一つの居場所づくり)

### 1 相談室と子ども、保護者とパイプづくりをしましょう

#### (1) おはよう、さようならで一日を

朝の教室や廊下、運動場で出会う子ども達の姿は様々です。子ども達の間を「おはようございます。」「元気ですか。」「あつ、すごいカブト虫だね。」などと声をかけながら回ることで一日を始めてみましょう。子どもの表情や活動の様子を見ながら、声をかけ、話をするきっかけをつくっていきます。

一人で廊下の隅にいたり、ポツンとしている子には、「今日は暑いね。」「今朝はすごい雨だったね。」など、何気ない会話をします。特に、不登校傾向のある子、気にかかる子、配慮を必要とする子については、心配りをしましょう。このようにして少しずつ顔見知りになり、名前を覚えます。

保護者についても、学校へ来られた時や、早退で子どもを迎えに来られた時などに、声をかけたりし、知り合う機会をつくりましょう。

顔見知りになったり、ちょっと身近な存在になったりすることで、校内を歩いている時に、「あの・・・、今日、相談室へ行ってもいい」「ポストに手紙を入れといたよ」などと、声をかけてくれる子ができます。時には、「あのね、昨日ね・・・」と言って、廊下や階段のおどり場で子ども達の話の聞かせてもらうこともあります。

「今日は、朝出かける時にちょっとぐずったんですけど、頑張って行きやあとと言って出したんです。」というような会話を、迎えに来られたお母さんと交わす機会も生まれてきます。

いつでも、どこでも、笑顔で子どもと挨拶を交わし、子どもの声を聞き、子どもと言葉を交わし合えるようにしましょう。

一人でも多くの子どもと知り合うことが、子ども達の抱えている心配事や悩みを早期にキャッチすることにつながります。また、このようなパイプづくりの努力を通して、「先生にちょっと話してみようかな」という雰囲気をつくることができます。この「話してみようかな」「相談してみようかな」と思う雰囲気が、相談室を利用する子どもを増やすことにつながります。

日々子ども達との関わりや語らいを大切にしていきましょう。

#### (2) あらゆる場で全ての人が教育相談ができる学校の体制づくりをしていしましょう

何かあったとき、子どもに対して、いきなり心を開くことを求めたり、素直に自分を語ることを求めても、それは無理なことです。

「お天気のこと、虫のことなど、身近な話題を通して、少しでも多くの子どもとの接点をもつ努力をすることが、学校における相談活動を進める大前提になります。本人が求める相談もありますが、時には友達の変調に気付いた子どもが、「心配だから」「あのね、友達が、『仲間はずれになって悩んでいる』と言って、私のところへ相談に来ているんだけど」と相談の必要性を教えてくれる場合もあります。

日々の言動のつながりや会話から、子どもの人間関係やグループ関係について理解をしておくことも大切です。子ども理解は、悩みを抱えた子どもの問題解決を図る際、望ましい支援を考えるときに役立ちます。また、担任は勿論のこと、養護教諭、図書整理員、生徒指導主事、教科担任などとの連携を大切に、日頃から子どもの姿について情報交流を重ねておきましょう。連絡を密にしておくことが、子どもの発するシグナルの見落としを防ぎ、早期にキャッチしたり、問題解決への道筋を開いたりします。

## 2 ほっと一息つける場所としての相談室の在り方を考えてみましょう

### (1) 落ち着いて話ができる場所を選びましょう

安心して話ができる場所がよいですね。かといって全く人通りのないところでは、子ども達に相談室の存在を知ってもらうことが難しくなります。例えば、特別室の近くや図書館などの近くにあり、帰りにちょっとしたのぞいたり、立ち寄って遊んで行こうかなと思えるところがよいですね。

### (2) 明るくゆったりとした雰囲気づくりをしましょう

いつでも入ってみようかな、遊びに行こうかなという気分になれるような部屋にしましょう。

* ソファー・机	⇒ 明るい色で場所を移動できるものがよいかもしれません。 遊びたいとき、ゆっくりと話したいとき、その時々ので雰囲気 で部屋の模様替えができると、部屋の活用方法が広がります。
* カーテン	⇒ 優しさや明るさ、爽やかさが感じられるものがよいでしょう。
* じゅうたん	⇒ 座ったり、寝転んだりして、リラックスできます。 その子のための空間をつくる時に、ついたてが便利です。

### (3) 季節感のある部屋にしましょう(花・掲示物など)

何気ないことかもしれませんが、四季を彩る花や掲示物があると、憩いの場、心休まる場になります。

4月は花瓶に一枝の桜の花を、6月はドアの前に紫陽花の花やアヤメの花に雨のしずく・・・。

掲示物を作っていると、相談室に来ている子が手伝ってくれることもあります。一枝の桜や掲示物を話題にして、子ども達とのつながりのきっかけができることもあります。

### (4) 詩や絵を掲げましょう

優しい気持ちで暮らしてほしいな、元気はつらつと生活してほしいな。そのために、折々の学校の様子や子どもの雰囲気にふさわしい詩や絵(カレンダーなどの写真を活用)を掲示してみるのもよいことです。

「あっ、これ金子みすゞの詩でしょう。国語の時間に習ったよ。」「この人って、口に筆をくわえて絵を描く人やよね。」など、掲示した作品などの話題がふくらむことでしょう。また、作者の人物や作品の世界に触れることで、子どもの心も豊かになります。

### (5) 遊び道具を備えましょう(トランプ、オセロ、おはじき、ブロックなど)

「トランプをやりたい」「先生、オセロやろ。でも、きつとまた、ぼくが勝つで」碁石で五目並べをしたり、遊び道具を使って自分達で考えた遊びをしたりします。学年やクラスが違っても、自然に相手を見つけて遊べる子もいます。

相手を必要とする遊び道具が備えてあると、友達を誘ったり探したりして遊ぼうとする意欲を喚起することができます。

### (6) 好きなことや得意なことが生かせるものを備えておきましょう

(パズル、けん玉、折り紙、ルービックキューブ、CDなど)

上級生のけん玉遊びを見た下級生が、「わあ、すごい」と驚きの声をあげました。ちょっと照れくさそうにしていますが、こんな体験をすることが本人にとっては小さな自信になるかもしれません。

普段、孤立感を感じていたり人との付き合いが苦手な子にとり、異学年との触れ合いが、ほっと安らぎを

感じさせてくれたり、自分のよさを発見させてくれたりします。

小さなブロックを組み合わせて、器用に動物や鳥をつくることができる子もいます。その子の素敵なところ（遊びの技であったり、優しさであったりするのですが）に触れることで、驚いたり尊敬したりすることもあります。

そこには、自分のありのままの姿を素直に受け入れてくれる場面が生まれています。自分らしくいられたひとときが、一日の生活を支えてくれる力にもつながることでしょう。

#### (7) 子どもの関心や興味のあるものを備えておきましょう(ザリガニ、金魚、小鳥、ハムスター、本など)

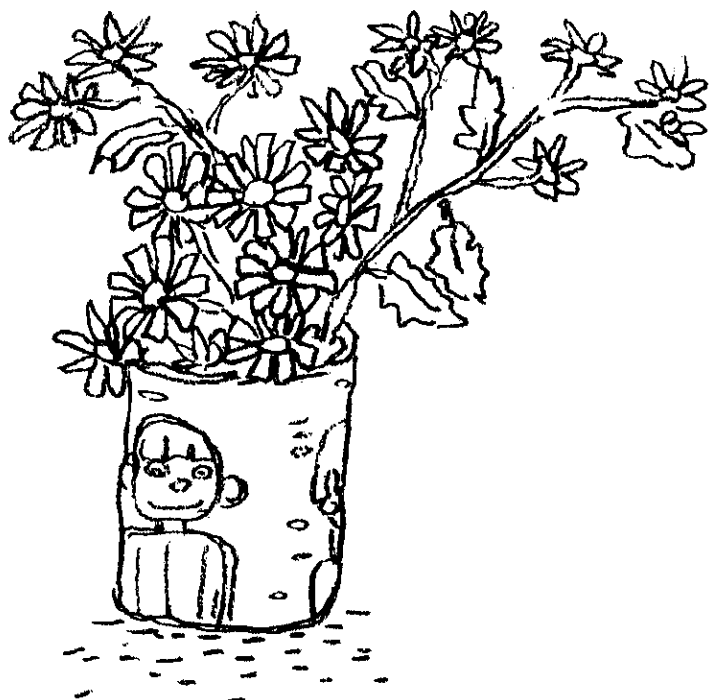
5月、6月は、ザリガニや蝶、トンボの幼虫など、教室の中にも生き物があふれる季節です。相談室にもザリガニや金魚、メダカなどの生き物がいるとよいですね。自分の関心のある生き物と一緒に遊んだり、餌をやったり、時には、水替えを一緒にやってくれることもあります。

子ども達が親しみを感じている生き物と触れ合ったり遊んだりすることで、心休まるひとときが過ごせることでしょう。

また、ぬいぐるみもよいですね。子どもの中には、幼いときに、ぬいぐるみやタオルを自分の宝物のようにしていた子もいます。ぬいぐるみを通して自分を語ってくれるかもしれません。

#### (8) 相談ポストを設置しておきましょう

相談室の近くに、カギのかかったポストと記入用紙を備えておくのもよいでしょう。「ちょっと相談してみようかな。」と思ったときに、手紙で知らせてくれるかもしれません。



### 3 相談室の利用方法の紹介をしましょう

〈例〉

- ◎ ひるやすみ ⇒ そうだんしつで あそびたいとき、ちょっと げんきが でなかつたりしたときなど じゅうに きてください。
- ◎ ほうかご ⇒ ちょっと かなしいことが あったり、ともだちと うまくいかないことが あったり、こころを やすめたいと おもったとき きてください。

そうだんしたいことを かいて ポストに てがみを 入れてね。  
ひにちを しらせてくれてもいいです。

このようにして、案内文を作って配布しましょう。相談室の前に掲示しておくのもよいですね。保護者にも知らせます。相談室からのお知らせとして、「家庭内だけで悩みを抱え込まないで、担任の先生や学校と一緒に子どもを支援していきましょう」というメッセージを添えて配布するのもよいですね。日時などが、設定できれば、保護者の方が訪ねやすいかもしれません。

### 4 相談活動の基本的な考え方の共通理解を図っておきましょう

〈例〉

#### (1) 相談 ⇒ 話を傾聴する

- ① 子どもの理解を深め、自己解決へ導く。
- ② 共に考え合う。互いの立場や気持ちを理解したり、共感したりする場を設定し、子ども同士の心と心をつなぐように支援する。

#### (2) 子どもの見守りと声かけをする

子どもが、「相談をしてよかった。」と思えることが、次の相談につながると同時に、友達や仲間に対する信頼感を高めることにつながる。相談を受けた後のフォローが大切。

担任や関係の先生との情報の交流をし、支援や指導の継続をする。必要ならば、専門機関への紹介も考える。

#### (3) 相談内容の秘密の保持に心がける

上記のように、相談活動の進め方について全校職員の共通理解を図っておきましょう。そして、相談室の利用状況や相談活動を通して、今、学校の課題として考えるべきことについては、教育相談委員会などに提案します。また、みんなに役立つ研修資料などについては、情報提供をします。

### 5 相談の進め方について考えてみましょう

#### (1) 話を傾聴しましょう

子どもの中には、「別に何もしてもらわなくてもいい。話を聞いてもらうだけでいい。」と言う子もいます。誰かに話をすることで、自分の心が落ち着いたり、すっきりしたりすることもあるのです。自分の納得のい

く方法が見出せるように支援していきましょう。

## (2) 相談内容を整理しながら聞く工夫をしましょう

子どもの理解を得た上で、相談の内容を紙に書いて整理してみましょう。理由、出来事の順序などを整理して、簡単なメモや図に表してみると、お互いに、客観的に考えることができます。

話を聞きながら、「その時、自分だったらどんな気持ち。」と尋ねてみます。尋ねられることで、相手への思いやりが足りなかったことに気付くことがあります。

「自分が本当に伝えたかったことは、その行為や言葉では伝わらなかったんだ。だから、自分は怒ったんだ。もっと分かるような方法で、言葉で伝えることが必要だったんだ」と気付くこともあります。

メモや図を見ながら話すと、初めは、相手のいけないことばかりに目が向いていたのが、自分のことを振り返ったり、相手の気持ちに目を向けていくようになります。

問題を整理し、お互いの関係を明らかにすることで、物事を客観的に見つけ、自分達の力で解決の糸口や方法を見つけやすくなります。支援の一つの手立てとして、活用してみてください。

## (3) 人と人との心をつなぐ方向へ支援していきましょう

子ども達の多くは、相談の内容について「誰にも言わないでね」と言います。それは、誰かに知られることで、自分の立場が悪くなることを心配しているからです。相談の秘密は守らねばなりません。

しかしながら、相談内容は学級、学年の中で指導を要することが多く含まれています。例えば、「男女仲良くしている姿を見て、からかわれて困っている。どうすればいい。」というような場合もそうです。男女仲良くすることの大切さについて、学級でも考えてもらうことが必要だということを、相談している子に丁寧に説明します（ここは、学級や学年への橋渡しするために、大事なところ）。そして、「相談してよかった」と思えるように、子どもの訴えにどのように対処するか、担任や関係の先生方とよく相談しましょう。本人の悩みが解決するように、日常生活の中で意図的、計画的に、また、機会をうまくとらえて指導していきましょう。

このようにして、子ども達の抱えている問題について、前向きな取り組みがなされていくなれば、子ども達は、学級や学年への所属感をしっかりと感じとっていけることでしょう。「相談してよかった」と思えることの積み重ねが、次の相談へつながります。

問題を一人で抱え込むのではなく、誰かに（友達、家族、先生など）伝え、共に考え合っていくことで、何とかしていこうという子ども達の気持ちを支えていきましょう。

ささやかですが、子ども達の心と心を結ぶ営みが、人への信頼感を高める営みにつながります。

## (4) 子どもと家族とをつないでいきましょう

保護者が相談室にみえます。これは、保護者が何とかしようと考えておられるからです。とにかく、ゆっくりとお話を聞かせていただきましょう。一段落したところで、「それで、どう思われますか」と投げかけ、ご自身の中にある迷いや考えを引き出していけるように進めます。そして、自分の中で解決の道筋が描いていけるように支援していきましょう。

また、子どもと保護者のお話を一緒に聞かせていただく機会では、まず子どもの話をよく聞かせてもらいましょう。子どもの心の中にある色々な思いを聞いておられるうちに、保護者は自分と子どもとの関係を自然に振り返っていかれます。その過程の中で、家族の距離がちょっとだけ接近していきます。

それぞれの立場でちょっと自分を振り返ってみる。そんな心のゆとりがもてるように、ゆっくりゆっくりと聞かせていただくことが大切です。

## 人間関係の結び方を共に考えていきましょう

「あのね、また私の手を引っ掻いたよ。」

「そう、どうして。」

「あのね、今は弾いてはいけないの。みんなの迷惑になるから。それで、オルガンのコードを抜いたの。そしたら、引っ掻いたの。」

「そう、コードを抜く前に何か説明したの。」

「駄目やよ、止めやあとと言っても止めんかったで。」

「そう、いきなりコードを抜かれたら、どんな気持ちになるかな…。」

「うーん。嫌な気持ち。」

「そうね、でも、引っ掻くのはいけないことだね。」

「何で引っ掻いたのかな。」

「腹が立ったから。」

「そうね、もうほかに駄目よという伝え方はないかな。」

「うーん。引っこ抜く前に優しく話せばよかった。」

「そうね。自分が悪いと分かっているけど嫌なことをされると腹が立ったりするね。」

ちょっと落ち着きのないA君は、よく注意をされます。B子さんもみんなのために一生懸命注意をしています。お話を聞きながら、「A君の良いところはないかな。」と尋ねると「生き物のことよく知ってる。スズメの世話をしている。」と答えてくれました。「そう。頑張っていることや

よいところも見つけていけるといいね。そうするとA君も嬉しくて心がすっきりするかもしれないね。」ということで、①ほめほめ作戦、②優しく話そう作戦でやってみようということになりました。

夏休みが終わって2学期。運動会の練習が始まったある日、「背中が痛い。」と言っていたA君のカバンを片付けていたB子さんの姿がありました。穏やかな関係が少しずつ生まれてきているようです。

